

◆五穀豊穰を寿ぐ、神々との祭典。

RCC早春神楽共演大会

2009年2月22日(日)



画/山根久明

暮らしの中で、脈々と息づいてきた伝統芸能・神楽。RCC早春神楽共演大会は「五穀豊穰を寿ぐ神々との祭典」をテーマに神楽そのものを見つめ直すとともに、将来の在り方を模索し、更なる向上を目的とする、素晴らしい大会をめざします。

●日時 2009年2月22日(日)

開場>午前8:45 開演>午前9:30

●場所 広島厚生年金会館 大ホール

●入場料(税込)全席指定

S席/前売券 5,500円 A席/前売券 4,500円 (当日券は各1,000円増)

2008年12月6日(土) 午前10時より前売り券発売開始!!

※神楽実行委員会では、12月8日(月)午前10時よりお電話でのチケット予約(発送のみ)賜ります。

◆演目・出演団体

【第一部/原点を見つめる】

「天の岩戸」谷住郷神楽社中(江津市)

【第二部/伝統を受け継ぐ】

「鍾 魁」津浪神楽団(安芸太田町)

「八岐大蛇」後野神楽社中(浜田市)

「黒 塚」筏津神楽団(北広島町)

【第三部/新たなる神楽への挑戦】

「滝夜叉姫」琴庄神楽団(北広島町)

「橋弁慶」大塚神楽団(北広島町)

「伊吹山」横田神楽団(安芸高田市)

「大江山」中川戸神楽団(北広島町)

「土蜘蛛」原田神楽団(安芸高田市)

「紅葉狩」上河内神楽団(安芸高田市)

●チケットのお求めは下記まで

- ・RCC文化センター TEL(082)222-0044
- ・ひろしま夢ぶらざ TEL(082)544-1122
- ・コムズ安佐パーク TEL(082)810-2000
- ・デオデオ本店 TEL(082)247-5111
- ・福屋広島駅前店チケットサロン TEL(082)568-3942
- ・フレスタ加計店 TEL(0826)22-2155
- ・アルパーク天満屋 TEL(082)501-1745
- ・千代田サンクス TEL(0826)72-3939
- ・フレスタ沼田店 TEL(082)830-1700

●主催:中国放送・RCC文化センター
●お問合せ:RCC神楽実行委員会 (RCC文化センター内)

TEL(082)222-0044

2009年RCC早春神楽共演大会

第一部／原点を見つめる

天の岩戸 あまのいわと 谷住郷神楽社中(江津市)

太陽・天照大神は、弟・須佐之男命(すさのおのみこと)のたび重なる乱暴に立腹され、天の岩屋へお隠れになりました。すると、天も地も常闇(とこやみ)の世界となり、悪神がはびこり、作物は枯れ、不安な日々が続きました。そこで、天児屋根命(あめのこやねのみこと)をはじめ、八百万(やおよろず)の神々は、大神のお出ましを相計り宴を開きました。天鈿女命(あめのうずめのみこと)が舞い踊ると、この騒ぎを不思議に思われた大神が少し岩戸を開かれ、これを待ち受けていた手力男命(たちかろうのみこと)が押し開いて、めでたく大神をお迎えします。世の中に光と平和が戻ったのです。これは、わが国の神話として伝えられ、中でも天鈿女命の「舞」は神楽の始まり、わが国の芸能の起源とされています。そして、日本人は、古代より自然崇拝の暮らしを築いてきたことを伝えます。

第二部／伝統を受け継ぐ

鍾馗 しょうき 津浪神楽団(安芸太田町)

鍾馗(しょうき)は、中国や日本に伝わる魔よけの神様です。中国では唐の時代、玄宗(げんそう)皇帝が長い病に伏せていたところ、夢の中に鍾馗が現われて神通力で病魔を追い払いました。皇帝が夢から覚めるとすっかり病が治っていました。神楽では、須佐之男命(すさのおのみこと)の化身が鍾馗大神と名乗って、民の命を奪おうとする疫病の悪鬼を退治します。左手に持つ丸い輪は、悪病の払いに用いる茅の輪で、姿なき鬼神をこれで捕らえ、右手の剣で倒します。古来、人の世には四百四種類の病が在ると言われます。備後(びんご)風土記には、蘇民将来(そみんしょうらい)という伝説があります。この物語は、みすぼらしい姿の武塔神(むとうしん)が一夜の宿を蘇民将来に頼んだところ、貧しいながら温かくもてなしました。翌朝、神さまは蘇民とその家族に「茅の輪」を腰に巻くよう言い残して去りました。間もなく、村中に疫病が流行りましたが、蘇民たちは助かったという話です。

八岐大蛇 やまたのおろち 後野神楽社中(浜田市)

出雲の国に暮らす足名稚(あしなづち)・手名稚(てなづち)老夫婦には八人の娘がいました。しかし年毎に一人またひとり大蛇に飲み取られ、七人まで娘を失いました。そしていよいよ八人目の娘が飲み取られる季節となり、老夫婦と八人目の娘・奇福田姫(くしなだひめ)は嘆き悲しんでいました。そこへ高天原(たかまがはら)から舞い降りた須佐之男命(すさのおのみこと)が通りかかり、その話を聞きます。命は、大蛇退治を決め、老夫婦に八塩折(やしおり)の毒酒を造らせ酒を入れた樽の後に娘を立たせませす。やがて、どこからともなく大蛇は押し寄せてきて、毒酒に映った娘の影を飲み干していきます。酔いの回るほどに騒ぎ、しだいに酔い伏してしまいます。これを待ち構えていた命は、壮絶な戦いの末、大蛇を退治します。更に大蛇の腹を切り裂くと、にぶい音と共に一本の刀が出てきます。これを天叢雲剣(あめのむらくものつぎ)と名づけ、天照大神(あまてらすおおみかみ)に捧げることにします。そしてめでたく奇福田姫を妻とし、平和で豊かな出雲の里で暮らしていくという物語です。

黒塚 くろづか 篠津神楽団(北広島町)

『鬼が棲む』と里人は恐れ、近づくことのない那須野ヶ原の黒塚へ、那智の東光坊の山伏・阿闍利社(あじかりゆうけい)と剛力(ごうりき)がさしかかる頃、日が暮れました。そこで、柴の庵(粗末な小屋)を見つけ、剛力は一夜の宿を願い、借ることが出来ました。この宿主こそ、里人に恐れられている金毛九尾(きんもうきゅうび)の狐の化身だったのです。夜中近く、狐は鬼女となって、二人を襲います。剛力は食べ殺され、山伏は逃げ去ります。その後、弓の名人三浦ノ介(みうらのすけ)、上総ノ介(かずさのすけ)によって悪狐は退治されます。悪狐は、絶命の時「毒石(どくし)となって世に害を放ってやる」と言い残します。この物語は、「安達ヶ原の鬼女の伝説」と「那須野ヶ原の殺生石(悪狐)の伝説」この二つの伝説が組み合わされています。

第三部／新たな神楽への挑戦

滝夜叉姫 たきやしやひめ 琴庄神楽団(北広島町)

平安時代も二百年を過ぎる頃、平将門(たいらのまさかど)は、「西の国に『天皇』在れば、自らは東の国の『新皇』となって関東一円を治める。」と宣言します。これによって藤原秀郷(ふじわらひでさと)・平貞盛(たいらのさだもり)に将門征伐の勅命が下り、将門はこの連合軍に敗れ去ってしまいました。この戦いが、「天慶(てんげい)の乱」と言われ、わが国の歴史に残ります。神楽の物語は、平将門の娘・五月姫が父の怨念を果たす為、貴船の社に「願(がん)」をかけ、妖術を授かります。五月姫は、その名を滝夜叉姫と改め、下総の国猿島(さしま)の地を根城に多くの手下に従え、朝廷への戦いを謀ります。これを伝え聞いた朝廷は、陰陽師・大宅中将光圀(おおやのちゅうじょうみつくに)を将軍として滝夜叉姫討伐軍を下総の国へ向かせます。いよいよ陰陽の術と妖術の激しい戦いになります。滝夜叉姫の復讐の物語です。

橋弁慶 はしべんけい 大塚神楽団(北広島町)

平安時代の末期、わが国の歴史に残る『平治の乱(へいじのらん)』によって牛若(後の義経)の父・源義朝は、平家に敗れます。幼き牛若は、平清盛に助命され遮那王(しゃなおう)と名を改め仏内に励んでいました。そこへ、将門坊と名乗る僧が現われ、遮那王は源氏の頭領・源義朝の一人であることを告げます。自分の素性を知った牛若は、平家打倒を心に秘め、昼は学問を修め、夜は武芸を磨くようになります。そして、鞍馬寺(くらまじ)を抜け出して貴船明神で烏天狗(からすてんぐ)に兵法を学びます。多くの「技」を修得した後、京の都へ潜みますが、五条天神の橋の上で比叡山の荒法師・武蔵坊弁慶(むさしぼうべんけい)に出会います。弁慶は、千本の太刀を奪う悲願を立て、あと一本という時に牛若に出会ったのでした。格闘の末、弁慶は牛若に屈すると同時に第一の家臣として、運命を共にすることを誓います。ここから数奇な運命に弄ばれた悲劇の英雄・義経と弁慶の物語ははじまります。

伊吹山 いぶきやま 横田神楽団(安芸高田市)

日本武尊(やまとたける)は、筑紫の熊襲タケルを討って西の国を平定し、都へ凱旋すると、間もなく東の国を平定せよとの勅命を受けます。妻・弟橘姫(おとたちばなひめ)を伴って東の国へ向かいますが、途中相模国(さがみのくに)走水(はしりみず)の海峡を渡る時、海が激しく荒れ狂います。姫は、武尊の武運を祈り、海神の怒りを鎮めるため犠牲(いけにえ)となって海に身を投げます。その後、武尊は、無事東の国を平定し、伊勢の国まで帰り、姫の御霊を弔う日々を送っていました。そこへ、都からの使者・韋駄天権内(いだてんごんない)が、近江(おうみ)の国・伊吹山の鬼人を成敗せよとの勅命を伝えてきました。武尊は、舞樂行脚の者に姿を変え、権内と共に伊吹山の鬼人の館へ向かいます。舞樂者と信じた鬼人は、酒宴を開いて「芸」を楽しむことにします。武尊は酒宴の中、剣舞を披露し、機を見て鬼人を成敗するという物語です。

大江山 おおえやま 中川戸神楽団(北広島町)

平安時代も中頃、京の都へ妖術を使う鬼が出没し、悪の限りを尽くしては北の方角へ飛び去っていく事件が重なりました。陰陽師が鬼の棲み家を占うと、丹波の国・大江山であることが分かりました。そこで、鬼退治の勅命を受けた都の守(まもり)・源頼光と四天王は、石清水八幡(いわしみずはちまん)・熊野権現、住吉神社に参拝し武運を祈り、姿は山伏修験者を装い、「神便鬼毒酒(じんべんきどくしゅ)」という神さまや人が飲めば力の源となり、悪鬼が飲めば毒となって力が衰える酒を背負い、大江山へと向かいました。鬼の岩屋へ着いた頼光の一行は、元々修験者であった鬼の頭・酒呑童子(しゅてんどうじ)から執拗に問答を迫られます。頼光は、ことごとく回答し、疑いを晴らすと共に持参した酒を「都の酒」として鬼たちにふるまいます。そして、鬼たちが酔いしれた処で壮絶な戦いははじまり、頼光たちは酒呑童子一味を成敗する物語です。

土蜘蛛 つちぐも 原田神楽団(安芸高田市)

大和の国を一望する葛城山に棲み付き、天下を攪乱(かくらん)しようとする土蜘蛛の精霊が、都の守・源頼光(みなもとのらいこう)へ忍び寄ります。時に頼光は病に伏し、頼光の美しい侍女・胡蝶(こちょう)は、典葉(てんやく)の守から葉を持ち帰るところを、土蜘蛛の精霊に襲われ、土蜘蛛の化身は胡蝶になります。頼光に毒薬を薬と偽って飲ませます。しかし、頼光に正体を見破られ、伝家の宝刀「膝丸(ひざまる)」で一刀浴びた土蜘蛛の精霊は葛城山へと逃げ帰ります。頼光は、我が身を救った宝刀膝丸を「蜘蛛切丸(くもぎりまる)」と改め、四天王にこの刀を授け土蜘蛛退治を命じます。ト部季武(うらべのすえたけ)と坂田公時(さかたのきんとき)は葛城山へ向かい精霊の妖術に立ち向かい凄絶な戦いの果てに成敗するという物語です。

紅葉狩 もみじがり 上河内神楽団(安芸高田市)

平安時代の中ごろ、武勇の誉(ほま)れ高い信濃の守・中納言平維茂(たいらのこれもち)は、「信州・戸隠山に棲み、世の中に災いを及ぼしている『鬼神』を退治せよ」との勅命を受けます。維茂主従は、戸隠の険しい道を登ります。季節は秋、艶やかに色づいた紅葉は陽を受けて燃えさかる炎のように美しい景色の中で、姫に化身した鬼神が「紅葉狩の宴(うたげ)」を開いていました。主従は誘われるまま宴の客となり、酔い伏してしまいます。麗しき姫は、鬼の正体を現し取り食らおうとしますが、その時維茂が日頃より信心する八幡大菩薩が現れ鬼女を追い払い「神剣」を授けます。正気を取り戻した主従は、鬼神との戦いに挑み、退治するという物語です。